

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月20日現在

機関番号：42202
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22520701
 研究課題名（和文） 古代・中世における八幡信仰と神国思想の研究－石清水と鶴岡の祭祀儀礼を中心に－
 研究課題名（英文） Study of god country and thought Hachiman faith in ancient, medieval
 –Mainly on religious service courtesy of Turugaoka and Iwashimizu –
 研究代表者
 鍛代 敏雄（KITAI TOSHIO）
 國學院大學栃木短期大学・日本史学科・教授
 研究者番号：90269291

研究成果の概要（和文）：平成22年度は、本研究課題の基盤調査研究と位置づけ、両八幡宮の古代・中世における祭祀関係史料を蒐集・調査し、データを集積した。平成23年度は、展開的な研究を実施し、研究会を開催し歴史的な意義を究明した。平成24年度は、総括的な研究と位置づけ、調査・研究した史料データの公開を前提に、本研究を促進するための研究に入った。当該の祭祀儀礼関係史料と神国関係史料の網羅的なデータベースを構築した。

研究成果の概要（英文）：Regard to this study, the fiscal year 2010, to the collection and research historical materials and positioning research foundation, the ritual relationship, with integrated data, Then fiscal 2011, was investigated historic significance to conduct research deployment basis, we held a study group. The fiscal year 2012, on the assumption of the public historical data positioned as a comprehensive study, the research and study, and went into the research for promoting this study further. I have developed a comprehensive database of historical materials related god country and the Annals of ritual-ceremonial relationship.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
2013年度	0	0	0
2014年度	0	0	0
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：日本史

科研費の分科・細目：中世史

キーワード：古代・中世・思想・宗教・神社・祭祀・儀礼・経済

1. 研究開始当初の背景

研究代表者がこれまで採択された科学研究費補助金課題研究「石清水八幡宮関係文書の総合的研究」(平成16年度～平成18年度、直接経費3,600,000円)、同「中世神社史料の総合的研究」(平成19年度～平成21年度、直接経費3,500,000円)の基本的な研究成果を基盤とし、本研究開始当初の背景となつて

いる。この間、科研費補助金にかかわる研究成果に関し、同上の研究課題の報告書を2冊刊行し、公開した。

さらにそれらの成果に基づいて、斯界の学術雑誌に、史料紹介および個別論文を多数発表し、学会において口頭報告をおこなった。なかでも研究論著としては、単著『神国論の系譜』(法藏館、2006年)、単著『戦国期の

石清水と本願寺』(法藏館、2008年)を發表し、史料の翻刻・校訂・解題『石清水八幡宮社家文書』(八木書店、2009年)を公刊した。このように、これまでの科研金補助金の成果による研究代表者の研究実績とその成果が、研究開始当初の基本的な背景となっていた。

また、研究代表者がこれまで採択された研究課題に関する補助金によって整備したOA機器や関連書籍、収集した資料などの物的資源、および調査研究の協力員らによる研究会や調査班、さらには史料所蔵者・所蔵機関といった人的資源が研究開始の準備段階の状況であった。

2. 研究の目的

本研究「古代・中世における八幡信仰と神国思想の研究－石清水と鶴岡の祭祀儀礼を中心に－」の目的は、研究代表者がこれまで採択された科学研究費補助金研究において調査・研究した課題をとおして蓄積した史料データを基盤とし、さらに斯界でもほとんど研究されていない、石清水八幡宮と鶴岡八幡宮における修正会・修二会、安居会、放生会などにかかわる祭祀儀礼と公家・武家政権との政治交渉、および八幡信仰と神国思想との密着した宗教構造を究明するところにあった。

古代・中世の日本においては、八幡宮と神国思想は相互補完の関係にあった。外患や内憂の際に、神国思想が昂揚し、かつ八幡神が公家権門・寺社権門・武家権門において崇敬された。『日本書紀』の神功皇后三韓征伐神話にその始原があり、神国日本が強く意識されたとき、神功皇后の皇子の応神天皇と同体となった八幡大菩薩が篤く信仰されたのである。

古代では清和朝、中世では蒙古襲来、そして豊臣政権の朝鮮出兵にあたって八幡信仰が昂揚した。

このように政治と宗教と思想が、神国と八幡との言説の上で融合したのである。

従来、神社研究は寺院研究に較べて全般的に立ち遅れていた。したがって、本研究課題においても、第一に、基礎資料の集積・翻刻・研究を推進すること。第二に、史料の公開の促進、第三に研究の深化と啓蒙活動にあると考えた。

本研究は、宗教史・神社史の調査・研究であるとともに、東アジア世界における政治思想史や宗教思想史とにかかわる比較史的な研究をも視野に入れた研究であった。

3. 研究の方法

本研究「古代・中世における八幡信仰と神国思想の研究－石清水と鶴岡の祭祀儀礼を

中心に－」の研究課題を達成するための具体的な研究計画と研究の方法は、以下の通りである。

すなわち、本研究は、3つの研究班によって調査・研究が実行された。その第一は、【修正会・放生会関係史料研究班】(A班)を、第二は、【安居・日使頭祭関係史料班】(B班)、その第三には、【神国関係史料班】(C班)を、それぞれ設置、組織した。研究代表者にくわえて、当該研究に関心をもつ若手研究者、大学講師やフェロー、大学院生らを研究協力員として動員し、各4名ほどの3つの研究班を設けた。

日常の調査・研究は、研究班のメンバーが情報交換をしながら、実施した。また、毎月、定例の研究会を開催し、A～C班の研究結果の報告を行い、横断的な議論を通して、新たな課題を探求しながら、研究を推進する体制を再構築していった。

平成22年度の計画は、本研究の基盤研究として位置づけた。研究A班は、古代・中世における石清水八幡宮および鶴岡八幡宮の修正会(修二会を含む)と放生会関係の史料を収集した。研究B班は、中世の石清水八幡宮および鶴岡八幡宮の安居会に関する史料を網羅的に収集し、なお石清水の日使頭史料をあらためて翻刻した。寺社の仏事としての安居会が、武家が主催する安居神事に転換した点を究明した。研究C班は、古代・中世における「神国」記載史料の収集とデータベース化を行った。それぞれが関係諸機関へと出向して、調査にあたった。

平成23年度の計画は、本研究の展開的な研究と位置づけた。平成22年度の調査・研究を継続しながら、それらの成果を基盤として、A～C班の共同研究会や合宿をとおして、研究課題を進展させるための調査テーマを発見し、相互に成果を共有しながら、各課題を促進させることを目指した。

さらに収集した史料データについては、データベース構築にむけた作業に入った。

平成24年度は、本研究の総括的な集成研究と位置づけた。修正会・安居会・放生会などの祭祀儀礼関係の史料収集に基づいて、目録データを構築、また「神国」「石清水」「鶴岡」記載史料の目録データベースの構築、石清水関係史料として、とくに内閣文庫所蔵「曇花院殿古文書」の前文翻刻と目録データベースの構築を実行し、公刊する準備を整えたのである。

4. 研究成果

本研究課題「古代・中世における八幡信仰と神国思想の研究－石清水と鶴岡の祭祀儀礼を中心に－」の研究成果は、以下の通りである。

その第一に、戦後の日本史学界においては、寺院史に較べて立ち遅れた神社史の領域にかかる調査・研究であった。研究代表者が20余年近く研究してきた石清水八幡宮と鶴岡八幡宮にかかわる、古代・中世の祭祀儀礼関係史料を調査・収集できたことの意義は大きいと思われる。とくに従来ほとんど顧みられることのなかった、両八幡宮の修正会・安居会・放生会の史料を蓄積し、目録データベースを構築できたことは重要な成果である。

今後は、この目録DBをもとに、全文フルテキスト・データの作成を推進する課題が残されているが、その土台が完成したと換言することができる。

その第二は、古代・中世における「神国」記載史料の目録データベースを構築した点が成果として評価できるものと思われる。研究代表者はかつて『神国論の系譜』（単著、法蔵館、2006年）を公刊したが、その執筆の準備段階で、古代から近世初頭までの「神国」記載史料を抽出、整理した。それに加えて、ことに中世前期においては、「神国」記載史料をほぼ網羅して収集し、データベース化できたものとする。従来このようなデータベースは公開されていないので、今後の一般公開を前提とした史料データの公開方法を研究する段階に入ったといえる。

その第三は、八幡信仰の究明である。おそらく渡来系の八幡神は、古代において菩薩として神仏同体し、もっともはやく習合した仏神であった。聖武天皇は大仏の守護神として宇佐八幡宮の八幡大菩薩を勧請して鎮守八幡社を造営した。現在の手向山八幡宮である。奈良時代は、薬師寺・唐招提寺・大安寺、そして平安京では東寺と、はやくから八幡大菩薩は鎮守神として寺院に隣接して祀られたのである。

ことにはじめて「神国」と見える『日本書紀』神功皇后条は、いわゆる三韓征伐神話として有名だが、応神天皇を懐胎した皇后の奮戦が神話化されている。のち八幡大菩薩と応神天皇が習合し、ますます、神国思想と八幡信仰が宗教思想上、密着したのである。さらに清和天皇の時代に、石清水八幡宮は宇佐八幡宮から勧請され、成立すると、王城鎮守となり、朝廷・公家の崇敬篤く、院政期に伊勢につぐ天下第二の宗廟として崇められた。そして武家の棟梁、源氏は氏神として篤く信仰したのである。八幡大菩薩は、まさに「戦争」と「平和」の仏神となったのである。

本研究課題で明らかになった神仏習合の論点は、①祀られる神仏、②祀る施設、③祭祀と儀礼、④国家権力の政治的・財務的な関与などである。本研究では、とくに③と④の密接な関係構造を究明できたところにある。なお中世では武家主催の神事となった安居会が、境内の都市自治の精神的な紐帯ともな

っていた点が判明した。

その第四は、戦後日本史学が遠ざけてきた天皇および天皇制や、戦争の実態的な研究課題に寄与できたと思われる点が成果の一つとしてあげられる。神社や神道も等しく、斯界のなかでは積極的に研究が推進されてこなかったのである。本研究は、このような研究状況に鑑みて、あらためて課題を設定したものであり、基本的な史料データはもとより、政治思想史や宗教思想史に一石を投じることができると確信している。とくに、八幡信仰と神国思想は日本社会の基層にたつた政治社会思想と考えられるのである。

今後は、このような日本文化に通底する思想と、アジアの文化との比較的研究に関し、規定性をもたらすものと思われるのである。歴史社会学的な基層文化の比較論を提言するための基礎となる研究成果が提示できたものと見なされるのである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 鍛代敏雄、「中近世移行期の石清水八幡宮と幕府・将軍」、(『戦国史研究』61号)、査読有、2011年2月(1~12頁)
- ② 鍛代敏雄、「石清水八幡宮の牛玉宝印について」、(『栃木史学』25号)、査読有、2011年3月(80~93頁)
- ③ 鍛代敏雄、「豊臣政権の間屋「諸商売停止」について」、(『栃木史学』26号)、査読有、2012年3月(70~74頁)

〔学会発表〕（計1件）

- ① 鍛代敏雄、「中・近世移行期の近江国の交通問題」、(日本史研究会・歴史学研究会シンポジウム・サマーセミナー、滋賀県、2010年8月26日)

〔図書〕（計2件）

- ① 鍛代敏雄（共著）、『石清水八幡宮境内調査報告書』、(八幡市教育委員会、2011年8月)、354頁(204~211頁、参考資料1~4頁)
- ② 鍛代敏雄（共著）、『歴史のなかの人間』、(おうふう、2012年3月)、227頁(163~179頁)

〔産業財産権〕

- 出願状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鍛代 敏雄 (KITAI TOSHIO)
國學院大學栃木短期大学・日本史学科・教授
研究者番号：90269291

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：